

記者報告

「遺品整理」高まる需要

家族の形や社会の変化で認知され

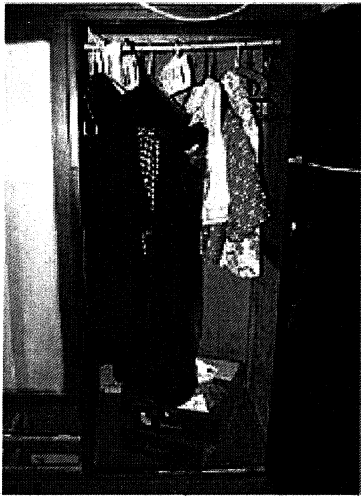
遺族らの手で行われることが多かった遺品整理。核家族化が進み、残される遺族の高齢化なども相まって、代わって請け負う業者の出番が県内でも増えている。

桐生市の住宅街にある平屋建ての借家。夫に先立たれて一人暮らしだった80代の女性が亡くなり、親戚から葬儀会社を通じた遺品整理の依頼を受けたサンライズコーポレーション（高崎市）が手がける「アイ遺品整理・家財・店舗整理」の作業に同行した。

「遺族が持ち出しているので、生命保険証や預金通帳、現金は見当たららないです」と、現場責任者の須藤大さん。念のため開けたタンスの引き出しには、1972年の札幌五輪の百円記念硬貨が1枚出てきた。見つかった未使用切手とともに、遺族に返却。整理した品々は燃えるゴミと燃えないゴミなどに大別し、袋に詰める。居間の仏壇や位牌は、寺に頼んで御霊抜きを済ませているという。

生前整理含め 月15件前後

東京都内のホテル勤務で埼玉県在住の栗原孝之さん（49）は、高崎市内のアパートで一人暮らしをしていて78歳で亡くなった父親の遺品整理などをする葬儀会社を通じてサンライズ社に依頼した。「自分で整理できなかったが、結果的に気持ちの切り替えができた」



●居間の仏壇は御霊抜きを済ませ、コタツ布団などの整理をする＝桐生市
●洋たんすには、衣類がそのまま残る＝高崎市

が出てきた。現在は遺品整理や生前整理など、月15件前後の依頼があるという。葬儀会社だけでなく、ケアマネジャーや行政の福祉担当者の相談を機に仕事を受けることも。「依頼主の要望は千差万別。何を求めているのか、よく聞く。こちらからも提案し、誠心誠意向き合うことで信用が生まれる」と塩野入さん。

生前整理の仕事は、「断捨離」ができないといった高齢者の困りごとを目を向けていく中で始めた。福祉施設への入所を機に引き払う公営住宅の片付けや、逆に施設から自宅へ戻る際に室内の不用な家財の処分や簡単な修繕も依頼される。

前橋市の冠婚葬祭会社のメモリードは12年に、市内に市民葬儀相談センターを設けた。個人情報を含む遺品の扱いや、布団などの大きな家財道具の片付けの相談が増えている。「思い出しの品は自分では捨てられないもの」。葬儀ソムリエと呼ばれる担当社員は話す。そこで始めたのが、遺品ご供養サービス。整理してほしい衣類、めがね、写真といった小物類を専用の供養袋に収めてもらい、提携寺院で供養後、収集運搬業者に委託して焼却する。

トラブル防止へ契約書必須

協会常務理事の長谷川正芳さんは「故人の遺品整理は2回目がない。必ず相見積もりをとりましょう。遺品整理士の資格を持っているからと安心せず、人柄も見積りの際の判断材料にしてほしい」と助言する。塩野入さんも経験を踏まえてトラブル防止の注意点をあげる。「リサイクル料金や追加料金の発生の有無など要望に応じた費用を確認し、必ず見積書や契約書をもらうこと」と話す。

（泉野尚彦）